

ASEAN 半世紀の評価と将来の展望

～ 域内統合基盤の構築から広域自由貿易の推進へ

ASEAN50 年の変化とは。
どこへ向かおうとしているのか。

在シンガポール コーポレートアドバイザー
矢野 暁

大学時代に戦後の米ソ冷戦の歴史と東南アジア政治・経済の動向を学んだ私は、その後 30 年余りにわたり、仕事・生活を通して東南アジア各国ならびに地域を内側から見てきた。しかるに 50 年という歲月における各国・地域の移り変わりは、自身の人生とも重なる部分が多分にある。この地域を束ねてきた ASEAN (東南アジア諸国連合) に対しては、「よくぞここまで持ちこたえたな」という感慨に浸らないわけにはいかない。

本稿では、まず ASEAN の性格・位置づけについて半世紀における変化を俯瞰し、その上で ASEAN の全般的評価を試みた後、現状を概観しつつ将来を展望したい。

政治から経済に重心を移行

1960 年代は米ソ冷戦により世界が二分されていた時代。米国は当時の外交政策の中で支配的であった「ドミノ理論」に依拠し、旧ソ連寄りのベトナムとラオスから周辺東南アジア諸国に共産主義の影響力が及ぶことを懸念。そのため、自由主義的であった域内 5 カ国の組織化を支援し、67 年に ASEAN が結成される。設立当初の ASEAN は極めて政治色が強く、その役割・機能は限定的

で、活動は決して活発・実益的と言えるものではなかった。世界においてさほど目立つ存在ではなかったとも言える。

だがベトナム戦争終結後の 70 年代後半以降、冷戦構造は崩壊に向かい、反共としての ASEAN の役割は低下。その一方で、80 年代から 90 年代にかけて、経済に重心を移行していく。95 年のベトナム、97 年のラオスの加盟がこの変化を如実に物語っている。この頃からが ASEAN の本格的スタートとも言え、その後 20～30 年ほどの比較的短期間に、(内容・スピード面で十分であったか否かの評価は別として) ASEAN は統合を強め、活動が活発化・高度化し、そして世界における存在感を増していく。言わば「一目置かれる存在」となったわけだ。

様々な差異を乗り越えて結束

この期間はまた、戦後東南アジアの政治体制を象徴していた開発独裁的な色彩が徐々に薄れていくと同時に、豊かになりつつある社会の中に「民主化」「自由化」の空気が流れ込んでいった時期でもある。86 年にフィリピンのマルコス大統領が失脚したのを皮切りに、90 年にシンガポールのリー・クアンユー首相、

98 年にインドネシアの Suharto 大統領、2003 年にマレーシアのマハティール首相といった強力な国家リーダーが政治の表舞台から姿を消していった。善悪は別として、トップ

ASEAN の半世紀

1960 - 70 年代 【反共・役割限定】	1967 ASEAN 発足 1976 ASEAN 事務局設置		1967 欧州共同体 (EC) 発足 1975 ベトナム戦争終結
1980 - 90 年代 【拡大・経済重視】	1984 ブルネイ加盟 1995 ベトナム加盟 1997 ラオス、ミャンマー加盟 1999 カンボジア加盟		1991 ソ連崩壊 1993 欧州連合 (EU) 発足 1997 アジア通貨危機勃発
2000 年代 【進化・域外協力】	2007 「中心性」に言及 2015 AEC 発足 2017 ASEAN 設立 50 周年		2007 世界金融危機勃発 2012 習近平総書記就任 2016 英国 EU 離脱決定 2017 トランプ政権発足

(筆者作成)